

虚子記念文学館投句特選句・令和二年七月

稲畑汀子 選

虚子館は扉を開けしまま風涼し 新潟 安原 葉

鳥の声満ち七月の森となる 兵庫 小杉伸一路

追ひ打ちの雨降りやまぬ出水かな 兵庫 三村純也

閉ざされて偲ぶ人あり梅雨の霧 兵庫 永沢達明

水音に濡れて着く館夏深し 兵庫 玉手のり子

句敵の軸並べたる涼しさよ 兵庫 坂口蜂子

おくれ来し人の大きな夏帽子 神奈川 進藤剛至

梅雨深くとも極楽の館へと 兵庫 内田泰代

喝采は朝までと知る女王花 鳥取 前田 千

芭蕉子規虚子それからの大夏野 奈良 杉田百花

入選句・令和二年七月

下闇に磨きの光る虚子デスク	岡山	奥山登志行	解夏の空両雄今も並び立つ	兵庫	よしだ芳子
七月の虚子館へ新し意気を	兵庫	平田 恵	虚子植ゑし俳樹の大き茂かな	大阪	鈴木寿子
水見舞電話の声にまづ安堵	大阪	山下幸典	白靴を買ひ足しもして空の旅	大阪	香山直子
合歓の花邸の二階で愛でたきや	兵庫	森岡喜恵子	闇割れて月の明かりの中にをり	京都	杉森大介
虚子館の芦屋記念の蚊と逢ひぬ	京都	宮本幸子	蜜豆のほのと塩味椀の底	兵庫	入谷千恵子
聞かぬ子の汗と涙や自己主張	滋賀	尾崎恵子	邂逅の先づ荒梅雨を問うてより	兵庫	西村みどり
梅雨深き森をゆくごと邸の樹々	兵庫	西村正子	祖母の又昔話よ茹小豆	兵庫	山口弘子
半夏生咲き初め雨もまた清し	兵庫	小柴智子	蟬の声より晴れてくる兆しかな	大阪	辻 昌子
束の間も養生午睡怠らず	兵庫	高野さち	打水の露地に添ふ風生まれけり	兵庫	山岸正子
誰彼と会へる虚子館とは涼し	兵庫	黒田千賀子	茹小豆一口ふふみ恙なし	兵庫	伊藤秀子
先生に出迎へといふ梅雨嵐	兵庫	奥田好子	空を恋ひ雲恋ひ泰山木の花	兵庫	涌羅由美
咲きのぼり虚空促へし鉄線花	京都	算 双子	虚子館の庭の蟻にも迎へられ	兵庫	堀口俊一
へなへなど太陽に負け七変化	兵庫	吉村玲子	緑蔭に永遠に眠るや大佳人	兵庫	岸田 健
半夏生咲いて勇気をもらひけり	大阪	岡西恵美子	祇園会のなき京淋し小糠雨	滋賀	石川多歌司
涼感の溢るるロビーの模様替	大阪	林 曜子	開き初む蓮まろまると膨らみし	石川	牧野妙子
雨上り一気呵成に庭の夏	兵庫	山西商平	虚子館の紫煙ゆるやか蚊遣香	兵庫	渡辺しま子
虚子館へ梅雨晴の歩を繋ぎけり	岡山	石井宏幸	空蟬の終に選びし桂かな	兵庫	田中節夫
それ以上誉め言葉なく女王花	兵庫	高橋純子	吾が影を運ぶケーブル夏の山	兵庫	福間笙子
トマト赤なる日待ち侘ぶ四歳児	兵庫	深尾真理子	水に飽きひとつ泡吐く金魚かな	岐阜	柴田恭雨
匂ひたつ風の百合の香この距離に	兵庫	岸川佐江	渦潮に吸い込まれゆく晩夏かな	千葉	玉井令子
待つといふ楽しみもまた女王花	兵庫	池田雅かず	父祖よりの清水に小さき観音像	愛知	村瀬みさを
どこにでも行けるしあはせ風薫る	兵庫	藤井啓子	燕飛ぶ絶対低空思う様	兵庫	安藤裕子
女王花羽衣色の朝来る	兵庫	辻 桂湖	熱帯夜夢と現を行き来せり	兵庫	佐々木啓川
七月の庭跳ね回るホースかな	奈良	好川忠延	みどりてふ明るき暗さにけり	石川	辰巳葉流
若さとは挑む心や雲の峰	兵庫	岩水ひとみ	峰二つ渡して架る虹の橋	石川	辰巳昌彦
梅雨晴間庭の水音軽々と	兵庫	長安悦子	長話日傘の影も移ろひて	東京	三球
バスの便七割減りし梅雨の山	兵庫	小川孝子	松侍り梅雨流しゆく芦屋川	東京	宮村土々
流螢やせせらぎの音は絶えざるに	神奈川	平野政良	梅雨晴間スキップ重しゴム長靴	神奈川	金子三奈乃
半夏生揺るるまた雨やもしれぬ	兵庫	渡部小凜	さひめ野の夕菅の香に遊ばれよ	兵庫	田村恵津子